とても大切なお話　６

敷津小学校　校長　原　雅史

では、なぜ文部科学しょうは今までのじゅ業のやり方をこの「主体てき・対話てきで深い学び」「子どもの学びをじゅ業の中心にする」方ほうにかえようとしたのでしょうか。

一番大きな理由は、その方が人間の体にあっているからです。人はつばさがないので空はとべません。魚のように水のなかでこきゅうもできません。動物にはそれぞれ向いている生き方があります。人が勉強するときに、先生やほご者から「勉強しなさい！」と言われて行った勉強は、あまり自分に身につくようにはなっていないことが、わかってきました。人間の身体は、そういうふうになっているのです。ぎゃくに、自分から進んで行う勉強は、たとえ短い時間でも、ものすごく頭の中に入っていきます。

だから世界のほかの国でではもう３０年い上前からこの「子どもの学び」が中心となる新しいスタイルで、じゅ業が行われているのです。そのけっか、日本の子どもにくらべて、「勉強がすき」というという外国の子どもは多いけい向にあります。そして日本よりほとんどの国では、勉強時間が少ないのです。

つまり、少ない勉強時間で、勉強がすきになり、せいせきもよくなる方ほう、それが「主体てき・対話てきで深い学び」のあるじゅ業なのです。とくに、この「主体てき」というところが重ようで、これをしていくだけで、勉強がどんどんすきになっていくのです。先生やおうちの人から言われて勉強するのではなく、「よし、勉強がんばろう！」と自分で思って、自ら主体てきに取り組むことで、少ない時間でも、勉強がすきになり、とく意になるということです。

（続きはまた次回にお話しします）